

ご所属 仙台大学
 はやかわ きみやす
 お名前 **早川 公康**
 【会員登録 2009 年】



～コメント～
 仙台大学大学院の懇親会にて。
 左は早川研究室を修了した
 東大阪大学の早田地翼助手。
 右はソチオリンピックに
 ボブスレー選手として出場
 した黒岩俊喜選手。

堺原千恵さんから紹介を受けました早川公康と申します。堺原さんとは学会の講習会や学術大会などで交流をさせて頂いてきました。

私は仙台大学大学院(学部兼任)で教授をさせて頂いております。所属は大学院スポーツ科学研究科および体育学部運動栄養学科です。スポーツ健康科学・スポーツ栄養学などの分野で仕事をしております。幼児から高齢者まで、スポーツ選手、健常者、障害者等に関わらせて頂いてきました。

これまで学内外の高校・大学などの陸上、サッカー、水泳、漕艇(ボート)競技等でチームまたは個人に対する食事・サプリメント指導を行なってきました。仙台大学では陸上競技部の副部長・コーチをさせて頂きました。平成 29 年からは名将・阿部肇(ただし)監督率いる全日本優勝実績のある漕艇部で副部長をさせて頂いています。また障害者スポーツサポート研究部 Co-Act.の部長もさせて頂いております。

さて、私が「スポーツと栄養」に関心を持ち始めたのは、愛知県立半田高校時代に遡ります。陸上をしていた自分自身の競技力を高めたいと思う中、“強くなるための栄養学”への関心が高まってきました。大学受験ではどこを受験しようかいろいろと迷いました。

高校が進学校ということもあり、周囲は東大や地元の名大などの旧七帝大、学部でいえば従来からのメジャーな学部(理系クラスだったこともあり、医学部、工学部、理学部など)を目指す人が多かったのですが、私はそれらの“通例?”とか“世間体?”にはとらわれませんでした。

当時はまだ、何を学びたいかよりも一流企業に入るためにはどの大学・学部に行くべきかという価値観が一般的だった気がします(特に私の周囲では)。しかし私はどんな就職先が待っているかよりも、“今、率直に学びたい分野”にこだわり、栄養学分野のある大学に決めようと思いました。ところが当時は全国を見渡しても「スポーツ栄養学部(学科)」とか「運動栄養学部(学科)」などの名称を掲げた大学は無く、一部の体育系大学や学部が研究室レベルで講座を開設している程度で、まだまだ本格的な基盤学科としては存在していなかったと思います。

そういう状況もあり、志望校選びはセンター試験ギリギリまで悩みました。最終的には、男子受験可能な国公立で(私学は経済的に無理)、さらには栄養系分野で最高偏差値、というふうに絞っていった結果、大阪市立大学食品栄養科学科を受験することになりました。

ノーベル賞の山中京都大教授の母校(院)としても知られている大学です。

ところが進路面談の際、高3の担任からは「女子が多いだらうに大丈夫なの？」と。親からも「男なのに栄養分野なの？」等々。まだまだそういう時代でした。案の定、入学後、同じ学科の男子は私一人だけでした(苦笑)。同じ大学の他学部の陸上部の同僚からは「モテモテなんじゃないのお～」と冷やかされる日々(実際はそうじゃないのに<苦笑>)。男子が二、三人いるのならまだしも、学科内で“男子一人ぼっち”はいろいろな意味で辛かったです。

それでもなんとか卒業を目指し、卒論は栄養生理学研究室の片山洋子教授(現名誉教授)から指導を受けました。その後、同大学院修士課程で健康生理学研究室(スポーツ医学)の藤本繁夫教授(現名誉教授)から指導を受けました。さらに博士課程から東大へ入学し、身体運動科学研究室の小林寛道教授(現名誉教授・元日本体育学会会長)から指導を受けました。

経済的に苦しかったこともあり、研究に専念できる時間があまりとれず、行き詰まりの日々が続きましたが、なんとか努力しました。

その後、東京大学大学院附属生涯スポーツ健康科学研究センターに技術補佐員として働き、研究活動にも従事しました。縁あって平成21年4月から仙台大学の専任教員となり、今に至ります。

私は大学時代に陸上の十種競技をしていました。最高実績は近畿選手権の2位です。

この時の優勝者が武井壮氏でした。彼は日本選手権でも優勝しました。十種競技は、「走・跳・投」があり、ほとんど全ての身体運動能力の要素が求められました。この経験はあらゆるスポーツ種目特性の理解に役立っていると思います。

もとより私は人格も実績もまだまだではありますが、大学の教育・研究者として、いよいよこれからとの決意で、皆様との交流を大切にしながら、共に成長して参りたいと思っています。今後ともよろしくお願いたします。